死後

芥川龍之介

……僕は床へはいっても、何か本を読まないと、寝つかれない習慣を持っている。のみならずいくら本を読んでも、寝つかれないことさえ稀（まれ）ではない。こう言う僕の枕もとにはいつも読書用の電燈だのアダリン錠（じょう）の罎（びん）だのが並んでいる。その晩も僕はふだんのように本を二三冊蚊帳（かや）の中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時（なんじ）？」

これはとうに一寝入（ひとねい）りした、隣の床にいる妻の声だった。妻は赤児に腕枕（うでまくら）をさせ、ま横にこちらを眺めていた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思っていた。」僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合わなかった。

「うるさい。うるさい、黙って寝ろ。」

妻は僕の口真似（くちまね）をしながら、小声にくすくす笑っていた。が、しばらくたったと思うと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう静かに寝入っていた。

僕はそちらを向いたまま、説教因縁除睡鈔（せっきょういんねんじょすいしょう）と言う本を読んでいた。これは和漢天竺（てんじく）の話を享保頃の坊さんの集めた八巻ものの随筆である。しかし面白い話は

勿論、珍らしい話も滅多にない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を読んでいるうちにそろそろ睡気を感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、じきに眠りに落ちてしまった。――

夢の中の僕は暑苦しい町をＳと一しょに歩いていた。砂利を敷いた歩道の幅はやっと一間か九尺しかなかった。それへまたどの家も同じようにカアキイ色の日除けを張り出していた。

「君が死ぬとは思わなかった。」

Ｓは扇を使いながら、こう僕に話しかけた。一応は気の毒に思っていても、その気もちを露骨に表わすこ

とは嫌っているらしい話しぶりだった。

「君は長生きをしそうだったがね。」

「そうかしら？」

「僕等はみんなそう言っていたよ。ええと、僕よりも五つ下だね、」とSは指を折って見て、「三十四か？　三十四ぐらいで死んだんじゃや、」――それきり急に黙ってしまった。

僕は格別死んだことを残念に思ってはいなかった。しかし何かSの手前へも羞（はず）かしいようには感じていた。

「仕事もやりかけていたんだろう？」

Sはもう一度遠慮勝ちに言った。

「うん、長いものを少し書きかけていた。」
「細君は？」
「達者だ。子供もこの頃は病気をしない。」
「そりゃまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、……」

　僕はちょっとＳの顔を眺めた。Ｓはやはり Ｓ自身は死なずに僕の死んだことを喜んでいる、――それをはっきり感じたのだった。するとＳもその瞬間に僕の気もちを感じたと見え、厭な顔をして黙ってしまった。

　しばらく口を利かずに歩いた後、Ｓは扇に日を除けたまま、大きい缶づめ屋の前に立ち止った。

「じゃ僕は失敬する。」

缶づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあった。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だった」と思った。

「君は今お父さんと一しょにいるの？」

「ああ、この間から。」

「じゃまた。」

僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲(まが)った。横町の角の飾(かざ)り窓にはオルガンが一台据(す)えてあった。オルガンは内部の見えるように側面の板だけはずしてあり、そのまた内部には青竹の筒が何本も竪(たて)に並んで

いた。僕はこれを見た時にも、「なるほど、竹筒でも好いはずだ」と思った。それから――いつか僕の家の門の前に佇（たたず）んでいた。

古いくぐり門や黒塀（くろべい）は少しもふだんに変らなかった。いや、門の上の葉桜の枝さえきのう見た時の通りだった。が、新らしい標札（ひょうさつ）には「櫛部寓（くしべぐう）」と書いてあった。僕はこの標札を眺めた時、ほんとうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはいることは勿論、玄関から奥へはいることも全然不徳義とは感じなかった。

妻は茶の間の縁側（えんがわ）に坐り、竹の皮の鎧（よろい）を拵（こしら）えていた。妻のいまわりはそのために乾皮（ひぞ）った竹の皮だらけ

だった。しかし膝の上にのせた鎧はまだ草摺りが一枚と胴としか出来上っていなかった。

「子供は？」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのう伯母さんやおばあさんとみんな鵠沼へやりました。」

「おじいさんは？」

「おじいさんは銀行へいらしったんでしょう。」

「じゃ誰もいないのかい？」

「ええ、あたしと静やだけ。」

　妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透していた。しかし僕はその声にたちまち妻の譃を感じ、少し声を荒

らげて言った。

「だって櫛部寓って標札（ひょうさつ）が出ているじゃないか？」

妻は驚いたように僕の顔を見上げた。その目はいつも叱（しか）られる時にする、途方（とほう）に暮れた表情をしていた。

「出ているだろう？」

「ええ。」

「じゃその人はいるんだね？」

「ええ。」

妻はすっかり悄気（しょげ）てしまい、竹の皮の鎧（よろい）ばかりいじっていた。

「そりゃいてもかまわないさ。俺（おれ）はもう死んでいるん

だし、――」

僕は半ば僕自身を説得するように言いつづけた。

「お前だってまだ若いんだしするから、そんなことはとやかく言いはしない。ただその人さえちゃんとしていれば、……」

妻はもう一度僕の顔を見上げた。僕はその顔を眺めた時、とり返しのつかぬことの出来たのを感じた。同時にまた僕自身の顔色も見る見る血の気を失ったのを感じた。

「ちゃんとした人じゃないんだね？」

「あたしは悪い人とは思いませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部（くしべ）某に尊敬を持っていないことははっきり僕にわかっていた。ではなぜそう言うものと結婚したか？　それはまだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑（いや）しいところに反って気安さを見出している、——僕はそこに肚（はら）の底から不快に思わずにはいられぬものを感じた。

「子供に父と言わせられる人か？」

「そんなことを言ったって、……」

「駄目（だめ）だ、いくら弁解（べんかい）しても。」

妻は僕の怒鳴（どな）るよりも前にもう袂（たもと）に顔を隠し、ぶるぶる肩を震（ふる）わせていた。

「何と言う莫迦だ！　それじゃ死んだって死に切れるものか。」

僕はじっとしてはいられない気になり、あとも見ずに書斎へはいって行った。すると書斎の鴨居の上に鳶口が一梃かかっていた。鳶口は柄を黒と朱との漆に巻き立ててあるものだった。誰かこれを持っていたことがある、――僕はそんなことを思い出しながら、いつか書斎でも何でもない、枳殻垣に沿った道を歩いていた。

道はもう暮れかかっていた。のみならず道に敷いた石炭殻も霧雨か露かに濡れ透っていた。僕はまだ余憤

を感じたまま、出来るだけ足早に歩いて行った。が、いくら歩いて行っても、枳殻垣(からたちがき)はやはり僕の行手(ゆくて)に長ながとつづいているばかりだった。

僕はおのずから目を覚ました。妻や赤子は不相変(あいかわらず)静かに寝入っているらしかった。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしんみりした蟬(せみ)の声がどこか遠い木に澄み渡っていた。僕はその声を聞きながら、あした（実はきょう）頭の疲れるのを惧(おそ)れ、もう一度早く眠ろうとした。が、容易に眠られないばかりか、はっきり今の夢を思い出した。夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤(つと)めている。Ｓは実際でもああか

も知れない。僕も、――僕は妻に対しては恐しい利己主義者になっている。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考えれば、一層恐しい利己主義者になっている。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。僕は一つには睡眠を得るために、また一つには病的に良心の昂進するのを避けるために○・五瓦のアダリン錠を嚥み、昏々とした眠りに沈んでしまった。……

（大正十四年九月）

底本：「芥川龍之介全集６」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年３月24日第１刷発行
　　１９９３（平成５）年２月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年２月１日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。